

産業構造の変化と都市の成長・衰退に関する分析

名古屋大学 ○学生員 田中雅裕 正会員 林 良嗣

1. はじめに

かつて世界に先駆けて工業化の進展したイギリスをはじめとする欧米諸国は、日本など後発諸国の追い上げによりその経済的地位を相対的に低下させていった。それらの国の中でも特に産業構造が重厚長大産業に極端に特化した都市では、基幹産業の衰退に伴い都市の衰退が進行し、いわゆるインナーシティ問題が深刻化したケースも少なくない。日本では欧米諸国のような極端な衰退都市の例はないが、NIES諸国からの輸入の増大など、経済を取り巻く環境は大きく変化しつつある。そこで本研究では、都市の成長・衰退と、こうしたマクロな国際経済環境との関係の分析を試みる。

2. 経済環境と都市問題

都市は経済活動の集合であるから、その経済的環境は都市の諸問題に対して大きな影響を及ぼすと考えられる。図-1は、そのような都市問題と経済的環境の関係性をまとめたものである。従来の都市に関する分析には、地域の経済のみを考慮したものが多く、国際的な意味でのよりマクロなレベルの経済環境に着目したものは少ない。ところが欧米の衰退都市はその主たる原因を重厚長大産業に特化した産業の構造的な不況に有するものが多く、近年の産業の国際化、ソフト化といった状況下で、マクロな経済の影響を明らかにするために、産業構造論的アプローチの重要性が増している。

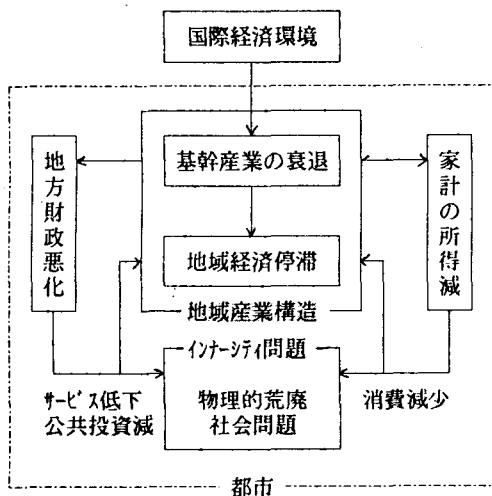
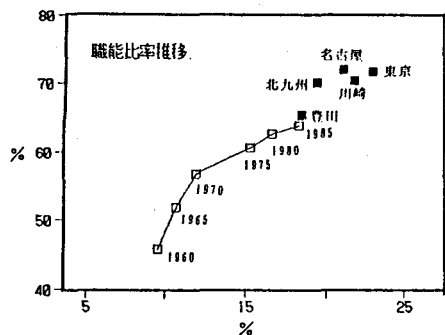


図-1 都市とその経済的環境

3. 産業構造変化とその要因

経済成長に伴う産業構造変化はしばしば就業構造で表現される。図-2は日本の産業構造変化を職能構造でみたものである。横軸は創造的と考えられる職種の就業比率を、縦軸にはサービスを提供する職種の比率をとったものであるが、時間の経過にともなって、右上へ推移しているのがわかる。以下でこのような産業構造の変化の要因について考察する。



□：全国の時系列推移 ■：主要都市での値（1980）

横軸：（専門的・技術的職業+管理的職業従事者）/全数×100

縦軸：（事務+販売+運輸・通信+保安職業+サービス職業従事者）/全数×100

図-2 就業構造にみる産業構造推移

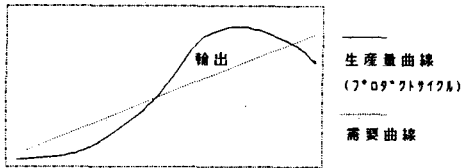
(1) 需要側要因

産業構造は需要構造に密接に関連している。特に国間での移転が困難な財に関しては、その国の需要構造が産業構造に直接影響を及ぼす。経済成長の過程における需要構造の変化は、1) 付加価値の高い財への需要のシフト、2) 所得弾力性の大きい財の需要の相対的増加、の2つに要約することができる。例えば農産物に代表されるような第一次産業の生産物の消費水準は、所得の増減に大きな影響を受けず、あるレベルに達すると所得が増えたとしてもそれ以降の伸びが小さい。これに対して、サービスのよう所得弾力性がより大きい財は急激に需要を増して行く。この時、サービスの輸入が困難であるために、その需要の伸びは直接産業構造に反映されていく。こういった現象が、産業構造のサービス化といわれるものといえる。ただし、所得弾力性の大きい財でも、より付加価値の高い財による代替がなされた場合、その需要は大きく低下して

いく。

(2) 供給側要因

近年の産業の国際化などの状況の下、産業構造は必ずしも国内需要構造に一致しない。こうした需要と生産のカイ離は、供給側の要因から説明できる。すなわち、国際間での移転が可能な財に関しては、生産に関する優位性の差異により生産の国際的配分がなされる。そういった優位性を規定するものは、1) 生産技術、2) 製造技術（労働生産性）、3) 設備水準、4) 原材料コスト、5) 労働コストなどがあげられるが、特に重厚長大産業の場合、製造技術と労働コストの時間的変化によりその生産量が導入期、成長期、成熟期、衰退期からなる典型的なサイクルを描いて推移するケースが多い。従って、経済成長の持続のためにはより付加価値の高い産業への構造転換が必要となる。産業のソフト化とか情報化と言われるものは、そういった産業構造転換の一面を捉えたものと理解できる。以上のように、ある国の一つの生産物の生産量の推移に着目した分析を、プロダクトサイクル・アプローチという。図-3は典型的なプロダクトサイクルと各局面の特徴をまとめたものである。



導入期 成長期 成熟期 衰退期
I II III IV
プロダクトサイクル各期の性質

	生産・輸出入	優位性の変化
I. 導入期	生産開始 輸入超過	技術移転、 生産技術の開発
II. 成長期	生産増大 輸出開始	製造技術の向上 (生産性の向上)
III. 成熟期	生産頭打ち 大量輸出	所得の増大、 生産性向上の限界
IV. 衰退期	生産減少 輸入開始	労働コストの増大 または代替財開発

図-3 プロダクトサイクルの概念と各期の特徴

4. 産業構造変化の基本メカニズム

前章の考え方に従い、経済成長に伴う産業構造変化のメカニズムを図-4のように需要側と供給側に切り離して考えることが可能である。すなわちある国の所得水準が決定されると、財毎の価格、需要弾力性などの属性に従い、需要構造が決定される。それに対する供給構造は、各国の技術水準、労働コスト、財の国際間の移転可能性などにに基づき国際的なバランスによって決定される。また所得水準はその国で生産できる付

加価値の総計で与えられると考えたなら、各産業の技術水準の時間的変化を与えることにより、需要、供給の両側から各国の産業構造の時間的変化が得られる。

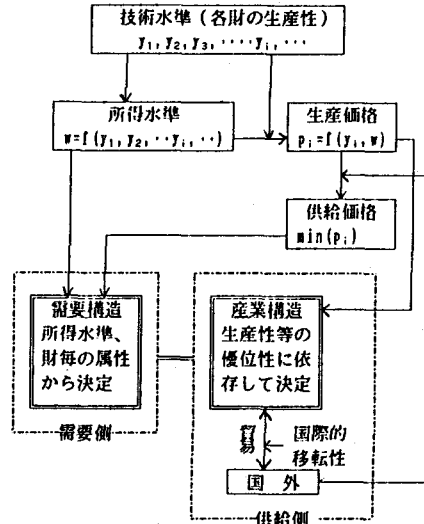


図-4 産業構造変化の基本メカニズム

以上のような産業構造変換のメカニズムについて、経済成長に伴う需要構造変化を与えるモデルと、生産の推移を与えるモデルによる説明を試みている。それらのモデルの詳細は発表時に紹介する予定である。

5. おわりに

本研究は都市の成長・衰退を規定する産業の成長衰退について、産業構造論的アプローチによる説明を試みたものである。構築済みのモデルにより、現在2、3の産業についてのシミュレーションを行っている。これによって、特に重厚長大の産業に特化した都市にの衰退過程の、経済面からの分析が可能である。ただし本研究で用いた産業構造理論は、超マクロレベルからのアプローチである。今後、こうしたマクロな経済の空間的な影響をモデル化することにより、よりミクロなレベルでの都市問題との関係関係を明かにしていく必要がある。

参考文献

- 佐貫利雄：成長する都市 衰退する都市、時事通信社、
- 土井浩永：Declining Cityの産業と人口構成変化の分析—北九州市とドルトムント市の比較—、名古屋大学卒業論文、1989
- 稲毛満春：経済入門業書「産業構造論」、東洋経済新報社
- 篠原三代平：産業構造論、筑摩書房、1966